

アイルランド現代詩二篇
アイリーン・ニクリャノーン
「トナカイと結ばれた女の子」
「トランスレイション
— マグダレンたちの二度目の埋葬に寄せて」

訳・注釈 池田寛子

詩人アイリーン・ニクリャノーンについて
(Eiléan Ní Chuilleanáin, 1942-)

アイルランドの詩人。コーク大学とオックスフォード大学で学び、英文学を専攻した。ルネサンス時代とその文学に造詣が深い。詩人としての執筆活動の傍ら、ダブリンのトリニティ・カレッジで教鞭をとった。三人の叔母が修道女であったことに影響を受け、修道女たちが生きてきた歴史に光を当てる試みを続けてきた。2016年から2019年までの3年間、アイルランドの詩人としては最高の地位である詩の教授職に就いた。

The Girl Who Married the Reindeer

I

When she came to the finger-post 1
She turned right and walked as far as the mountains.

Patches of snow lay under the thorny bush
That was blue with sloes. She filled her pockets.
The sloes piled into the hollows of her skirt. 5
The sunset wind blew cold against her belly
And light shrank between the branches
While her hands raked in the hard fruit.

The reindeer halted before her and claimed the sloes.
She rode home on his back without speaking, 10
Holding her rolled-up skirt,
Her free hand grasping the wide antlers
To keep her steady on the long ride.

II

Thirteen months after she left home
She travelled hunched on the deck of a trader 15
Southwards to her sister's wedding.

1.10 home トナカイの住処が「女の子」にとってすでに自分の家だと感じられている。1.14 の home は人間界の彼女の家。

トナカイと結ばれた女の子

I

彼女は道標まで来ると

右に曲がって歩き 気づくと山深いところにいた。

雪がパッチワークのように 茨の灌木の合間を敷き詰め

スローの実で茨は青く見えた。彼女はポケットに実を詰め込んだ。

スローはスカートのくぼみにも押し込まれた。

日没の風が少女のおなかに寒気を吹きつけ

枝の間から漏れる陽の光は かぼそくなっていった

彼女が両手で固い実をかき集めている間に。

トナカイが彼女の目の前で止まり スローの実を求めた。

彼女は彼の背に乗り家路についた 何も言わずに

たくし上げたスカートを握り

もう片方の手は幅広い枝角を掴んだ

長旅のあいだ 落ちないように。

II

家を出て十三か月たった頃

彼女は旅に出た 商船のデッキの上に身を屈め

南へと 妹の結婚式に招かれて。

Her eyes reflected acres of snow,
Her breasts were large from suckling,
There was salt in her hair.

They met her staggering on the quay; 20
They put her in a scented bath,
Found a silken dress, combed her hair out.

How could they let her go back to stay
In that cold house with that strange beast?
So the old queen said, the bridegroom's mother. 25

They slipped a powder in her drink
So she forgot her child, her friend,
The snow, and the sloe gin.

1.19 「女の子」が故郷に帰るために船に乗る必要があり、髪の毛に塩が混じっていることからすると、トナカイは異界の住人で、女の子はトナカイの背に乗って海を渡り、二人は竜宮城のような海底の国に住んでいたとも考えられる。伝統的にアイルランドの異界はしばしば海底や沖合のどこかにあるとされ、「波の下の国」の名で呼ばれることもある。トナカイと「女の子」が暮らした場所については「海」と「雪原」のイメージが交錯し、この世ならぬ世界への想像をかき立てる。

1.25 bridegroom 「婿」は、「女の子」の結婚相手のトナカイ、もしくは彼女の妹（姉）の婿。前者であるとするれば、女王が自分の息子をトナカイに変身させたということになる。「女の子」は「シルクのドレス」を着せられたものの、結婚式に出席したという描写はない。「妹の結婚」という知らせは、「女の子」を引き戻すための罠だったのかもしれない。

1.28 the sloe gin トナカイと出会ってから、「女の子」は大人になり、母になった。そのプロセスは果実のスローからお酒のスロージンへの変化と重なる。

何エーカーもの雪原を映し出した瞳
授乳で膨らんだ豊かな胸
塩交じりの髪の毛。

彼らは波止場でよろめく彼女を迎え
香り立つ風呂に入れ
シルクのドレスを着せ 髪を梳かした。

あの子を戻らせてはならぬ
奇妙な野獣が待っている あの寒々した家に。
老いた女王はのたもうた このお方が婿の母。

彼らは彼女の飲み物に粉薬を滑り込ませた
だから彼女は忘れた わが子と友と
雪と スロージンのこと。

III

The reindeer died when his child was ten years old.
Naked in death his body was a man's, 30
Young, with an old man's face and scored with grief.

When the old woman felt his curse, she sickened,
She lay in her tower bedroom and could not speak.
The young woman who had nursed her grandchildren nursed her.

In her witch time she could not loose her spells 35
Or the spells of time, though she groaned for power.
The nurse went downstairs to sit in the sun. She slept.
The child from the north was heard at the gate.

IV

Led by the migrating swallows
The boy from the north stood in the archway 40
That looked into the courtyard where water fell,
His arm around the neck of his companion —
A wild reindeer staggered by sunlight.
His hair was bleached, his skin blistered.

-
- 1.31 score トナカイは10年間子どもと共に妻を待ち、悲しみのうちに死んだ。
動詞 score「刻む」は、1.60の子どもにトナカイの角の跡が刻まれていたという
くだりで再び出てくる。
- 1.43 staggered 人間界に戻った時、「女の子」もよろめいていた。眩暈を覚える
という身体的反応は、トナカイのいる北の国、すなわち異界とこの世のギャップ
の大きさを物語っている。

III

トナカイは死んだ わが子が十歳になった頃。
死んだときは裸で 男の人の体
若くして顔には老人のような哀しみを刻んで。

老女は彼の呪いにより病に臥し
塔の寝室に横たわり すっかり口を閉ざした。
彼女の孫たちを育てた若い女性が彼女を介護した。

魔女の時 彼女に解けなかった呪縛
それは一時の呪縛 だが力ゆえに彼女は呻いた。
介護の女は階下に降り 陽だまりに座り 眠りに落ちた。
門の方では 北から来た子どもの声がした。

IV

渡り鳥のツバメの群れの導きにより
北から来た少年が入り口のアーチの下に立った
中庭が続き そこには噴水があった
彼は腕を仲間の首に巻きつけていた —
それは野生のトナカイで 日の光によたよたしていた。
少年の髪の色は抜け落ち 皮膚には水疱。

He saw the woman in wide silk trousers 45

Come out of the door at the foot of the stair,

Sit on a cushion, and stretch her right hand for a hammer.

She hammered the dried broad beans one by one,

While the swallows timed her, swinging side to side:

The hard skin fell away, and the left hand 50

Tossed the bean into the big brass pot.

It would surely take her all day to do them all.

Her face did not change though she saw the child watching.

A light wind fled over them

As the witch died in the high tower. 55

She knew her child in that moment:

His body poured into her vision

Like a snake pouring over the ground,

Like a double-mouthed fountain of two nymphs,

The light groove scored on his chest 60

Like the meeting of two tidal roads, two oceans.

1.45 wide 1.12 で同じ形容詞で説明されていたのがトナカイの角。つややかな絹をまとった二本の脚を広げて立つと、角を逆にした形に見える。今は亡きトナカイと「女の子」の目に見えない絆が暗示される。

彼は見た 幅広のシルクのズボンをはいた女性が
ドアから出てきて階段の下で
クッションに座り 右手をハンマーへと伸ばすのを。
彼女が干からびた長い豆を打つ ひとつ ふたつと
ツバメが体を揺すり リズムを取った。
固い皮が剥がれると 左手で
豆を大きな真鍮のポットに投げ込んだ。
すべてを終えるのに丸一日かかるにちがいない。
子どもがじっと自分を見ているのに気づくが 女は表情を変えない。

軽やかな風が二人の頭上を渡った
そのとき高い塔で 魔女が息絶えたのだ。
そのとき彼女は 自分の子どもに気づいた。
子どもの体が彼女の視界にするりと入ってきた
地面をすると横切る蛇のように
ふたりのニンフのふた口の噴水が湧き上がるように
浅い溝が子どもの胸に刻まれていた
二筋の潮の道 二つの大海原が交わるように。

Translation

for the reburial of the Magdalenes

The soil frayed and sifted evens the score — 1
There are women here from every county,
Just as there were in the laundry.

White light blinded and bleached out
The high relief of a glance, where steam danced 5
Around stone drains and giggled and slipped across water.

Assist them now, ridges under the veil, shifting,
Searching for their parents, their names,
The edges of words grinding against nature,

As if, when water sank between the rotten teeth 10
Of soap, and every grasp seemed melted, one voice
Had begun, rising above the shuffle and hum

Until every pocket in her skull blared with the note —
Allow us now to hear it, sharp as an infant's cry
While the grass takes root, while the steam rises: 15

Washed clean of idiom: the baked crust
Of words that made my temporary name:
A parasite that grew in me: that spell
Lifted: I lie in earth sifted to dust: 20
Let the bunched keys I bore slacken and fall:
I rise and forget: a cloud over my time.

トランスレイション

— マグダレンたちの二度目の埋葬に寄せて

土くれは 剥がされ ふるわれ 皆を横並びにする
この場にはどの地方の女たちもいる
あの洗濯場がそうだったように。

白い光が目くらませ 色を抜き取る
高浮き彫りに 視線を投げると そこでは蒸気が踊り
石造りの排水溝のまわりで くすくす笑いながら 水面を滑った。

今こそ彼女らに手を差し伸べよ ベール下の隆起がうごめく
両親を探し 自分の名前を求めている
言葉の刃は 自然の力で摩滅されゆく

朽ちた歯の如き石罅の間を水が沈み
掴もうとする手は溶けあうかに見えた その時 ひとつの聲が発せられ
ざわめきと足音の合間を上昇し

調べを奏でつ 女の頭蓋骨の洞で訝したのか—
我らに聞かせよ 赤子の泣き声ほどに甲高いその調べを
時を同じくして 草は根を張り 蒸気は昇る：

イデオムから足を洗わせたまえ 焦げたパンの皮の如き
言葉が一時の私の名前
体内で肥大化した寄生虫よ その呪いが
解かれて 私は地に横たわる 砂塵と化して
抱えてきた鍵束は 紐を緩め 落ちるにまかせよ
昇天そして忘却 私の時を覆うひとひらの雲

罪を犯したとされる若い女性を「マグダレン」と呼んで収容した修道院管轄の保護施設がダブリンをはじめとしてアイルランド各地に存在した。最後の施設が閉じられたのは1996年のことである。彼女らのほとんどは未婚の母で、施設で出産した。その後すぐに母子は引き離され、多くの子どもは養子に出された。女性たちは無報酬で洗濯作業に従事した。ここで生涯を閉じ、その周辺に墓石もなく埋められていた女性たちのために、ダブリンのグラスネヴィンに墓地が用意された。彼女らの遺骨の再埋葬のセレモニーのために書かれたのがこの詩である。詩で展開されるのは、死者たちの肉体、精神、言葉、声に思いを寄せる詩人の幻想である。過去と現在が境目なく交錯し、過去が決して失われていないことが察せられる。

translation はさまざまなレベルにおける「別のものへの変化」を表す言葉であり、言語間の「翻訳」にとどまらないため、タイトルは「トランスレイション」とした。この詩の中心となるのは、死んだ女性たちの声を詩の言葉へと「トランスレイト」しようとする試みである。キリスト教用語として「トランスレイション」には「生きたままの昇天」という意味もある。犠牲者らの肉体が天国で永遠に生きる体へと「トランスレイト」されていくことへの願いと共に、その体が自然の中を永遠に循環する何らかの物質へと「トランスレイト」される様が詩には刻まれる。

11.1-3 新しい墓場の情景。墓場の土を平らにならす作業が、女性たちを皆同じ立場にした死の作用と重ねられる。施設においてすでに人格の均質化が進められていたことも次第に明らかにされる。

1.4 White light blinded and bleached out 施設内あるいは洗濯場の情景。罪を洗い流すために洗濯に明け暮れる日々は思考停止を促し、ある種の洗脳状態を導いた。

1.5 The high relief of a glance 白い壁や天井には立体的な装飾 (high relief) が施されていた。reliefには「救済」の意味もあるが、これは女性たちには

届かなかった。

- 1.5, 1.15 steam 洗濯場には蒸気が立ち込めていた。自由に踊り回り、くすくす笑う蒸気と対照されるのは、抑圧された女性たちの肉体と精神、発することを許されなかった声である。何も知らないままに母から引き離された子どもたちのあどけない笑い声も想起される。かつて女性たちを包んでいた蒸気は、15行目で自然界を上昇する蒸気へと「トランスレイト」される。後者は虚空をさまよう死んだ女性たちの魂を思い起こさせ、蒸気を介して過去と今が交差する。
- 1.7 ridges 墓場の土の隆起に埋められた体が重ねられ、地中を移動する死者たちが想像される。土が描く曲線は「ボール」と表現されることによってさまざまな連想を呼ぶ。たとえばそれは、女性たちのアイデンティティを覆い隠していたボール、修道女たちがまとっていたボール、彼女らの肉体と欲望を包み隠していたボール。墓場と施設はここでも重なり合う。
- 1.8 Searching for their parents, their names 女性たちは家族にも見捨てられた形になるが、死後も「両親」を求めて地中をさまよっている。「名前」を探さねばならないのは、施設に入ると別の名前を与えられたためである。こうしてそれぞれの個性や感情、それまでの人生を抹消しようとするような更生の日々が始まった。これもひとつの「トランスレイション」であり、この詩はこれに対抗しうる「トランスレイション」を企図している。死者の名前を可能な限り特定して埋葬しなoshi、修道院に入れられる前の状態をわずかも回復することが、新たな墓地を設ける一つの意義でもある。
- 1.9 The edges of words grinding against nature 詩人は女性たちの「言葉」(words)に思いを馳せつつ、彼女らの声(1.10 voice)、そこに響く調べ(1.13 note)を聞き取ろうとしている。「言葉の刃」(The edges of words)という表現に注目したい。あらゆる言語表現に現れる言葉が「刃」を伴っていることについて、詩人は次のように述べている——「近世において言語は鋭い刃を保っており、それぞれが異質さを保持していた。今の時代、別の文化

を知ろうと思えば手軽な入門書が用意されており、違いがはっきりしなくなつたように思われる」。さらに、翻訳の意義について「言語間の溝を越えようとするあらゆる試みは部分的な成果に留まり、幻想的な試みに過ぎないともいえるが、これに挑戦することを強く勧めたい」と明言している。「言葉の刃」を形成するのは、使用された「言葉」を取り巻く各地域、各個人、それぞれの背景事情であろう。どの言葉も「トランスレイト」できないニュアンスを帯びる。「刃」は相互理解の障壁にもなる。それぞれの女性たちの言葉に耳を澄ませたならば、他者と自己を隔てる鋭い差異としての「刃」が感じられることだろう。そのすべてがかけがえのない意味を持つ。だが女性たちの言葉はそれを発するはずだった彼女らと共に葬られ、今や誰もその内容の詳細を知ることはできない。詩の力で「言葉の刃」の摩滅を阻止することもできない。限界を痛感しつつ詩人が書き留めようしたのは、言葉にできないまま女性たちの「頭蓋骨」の隅々（l.13 every pocket in her skull）にあふれ、増幅されていた「声」である。詩人の心が捉えたこの「声」は音楽に近い状態にあって、その歌うような「調べ」には、女性たちが産み落として間もなく失った嬰兒たちの泣き喚く声も唱和する。

ll.10-11 …when water sank between the rotten teeth / Of soap, and every grasp seemed melted 施設での洗濯作業にも「トランスレイション」が介在する。腐った歯と化したかのような石鹼、汚水に解けていくかのような手の動きが連想させるのは、終わりのない重労働の日々、上塗りされていく罪の意識が女性たちの心身を蝕んでいく様である。腐敗と汚水のイメージは、隠蔽された社会の汚点としての施設の状況を象徴する。

ll.11-12 …one voice / Had begun, rising, l.15 the steam rises, l.21 I rise and forget 動詞 rise が三度繰り返され、女性たちの安らかな昇天への祈りを響かせる。主語はそれぞれ「声」、「蒸気」、「私」、と異なっているが、これらは相互に関わり合っている。

l.15 While the grass takes root, while the steam rises 詩人が死者の声と肉体

の永遠化に向けた「トランスレイション」に心を尽くす間にも、死者たちは自然の中へと「トランスレイト」していく。

- 1.16 Washed clean of idiom ここから今は亡き女性たちの声のトランスレイションが始まる。その台詞の内部でもトランスレイションが起こっている。女性たちを苛んできた有形無形の力は「イディオム」と称され、これが身体を侵食する「モノ」へと次々と「トランスレイト」され、具体的で肉感的なイメージを結ぶのである。ここから想像されるのは、押し付けられた「名前」に象徴される、「焦げたパンの皮のような言葉」(ll.16–17 the baked crust / Of words) を無理やり飲み込まされるような女性たちの日々である。「イディオム」は体内に押し込まれると「寄生虫」(1.18 parasite) のように居座り、「呪い」(1.18 spell) となって心身を苛んだ。「呪い」の背後に透けて見えるのは、女性たちの運命を決めることになった罪のない子どもたちの姿である。女性たちにも罪はなかった。罪の意識を刷り込もうとする「イディオム」に取り込まれたくないという思いが当時の女性たちの心にもあったのだとしても、言葉にすることは許されなかった。そして「イディオム」の実態と詳細を正確に把握し、明らかにする作業は当時も今も容易ではない。ここでは死者が詩人に憑依し、両者の力が融合して「イディオム」の詩的な「トランスレイト」を試みたかたちになる。

- 1.21 …a cloud over my time かつて洗濯場を満たしていた蒸気、女性たちの魂と声は雲へとトランスレイトされる。

この詩は「マグダレン」たちに捧げられた祈りの歌であると同時に、「トランスレイション」についての詩である。死者の言葉を再現する、あるいは代弁することは不可能であるという詩人の思いが底流にある。拙訳はこれまでなされてきた様々な解釈を加味しつつ編み上げたものである。幾通りもの「トランスレイション」の可能性がこの詩には潜在している。他の選択肢を挙げ、それについて説明を施そうとすればさらに注が膨らむため、一つの解釈を補う説明

に留めた。原詩に立ち返り、別の連想をめぐらせる自由が読者にはある。一つには収まり得ない女性たちの声は、読者それぞれによる「トランスレイション」を求めている。

‘Translation’ and ‘The Girl Who Married the Reindeer’ by Eiléan Ní Chuilleanáin from *Collected Poems* (2020) are reproduced by kind permission of the author and The Gallery Press. www.gallerypress.com

本稿は科学研究費基盤研究（C）研究課題／領域番号 21K00387 研究課題「トランスナショナルなコンテキストにおける現代アイルランド女性詩の挑戦と展望」の成果の一部である。